

複数コホートの大学1回生 : 4回生の縦断データから見た大学生生活充実度の学年変化

| | |
|--------|---|
| 著者名(日) | 坂田 浩之, 佐久田祐子, 奥田 亮, 川上 正浩 |
| 雑誌名 | 大阪樟蔭女子大学研究紀要 |
| 巻 | 3 |
| ページ | 29-37 |
| 発行年 | 2013-01-31 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1072/00003828/ |

複数コホートの大学1回生～4回生の縦断データから見た 大学生生活充実度の学年変化

心理学部 臨床心理学科 坂田 浩之
心理学部 ビジネス心理学科 佐久田祐子
心理学部 臨床心理学科 奥田 亮
心理学部 発達教育心理学科 川上 正浩

要旨：大学生生活が十分に機能するためには、大学生自身が大学生生活に主体的にコミットし、充実感を感じる事が重要であり、大学教育を向上させるためには、大学生生活充実度を適切に測定し、大学生生活充実度を規定する要因を明らかにすることが必要である。そこで本研究では、先行研究（奥田・川上・坂田・佐久田，2010a）の知見を踏まえて、1回生～4回生を対象に大学生生活充実度尺度、その修正版、および大学生生活充実度尺度短縮版（SoULS-21）を実施し、大学生生活充実度が学年進行に伴いどのように推移するのかについて、4年度分の1～4回生の縦断データから分析を行った。その結果、4回生時に充実度全般が最も高まる事が明らかになり、奥田他（2010a）の知見の妥当性が支持された。また、学業に対する満足感については、コホートによって学年変化が異なる事が明らかにされ、カリキュラムやプログラム、学科編成、あるいはコホートの特性によって影響される可能性が示唆された。

キーワード：大学生生活充実度、学年変化、縦断データ、コホート、大学満足度

問題

個人のライフサイクルにおいて大学生時代は、様々な経験を通して、自分らしさや自分とはどのような人間かについて考える時期であり、社会に出るための準備期間として位置づけられる（及川・坂本，2008）。

このことに関連して、吉本（2004）は、社会的自立に関わる日本の大学の機能について、日本と欧州11カ国（イギリス、イタリア、オーストリア、オランダ、スウェーデン、スペイン、チェコ、ノルウェー、フィンランド、フランス、ドイツ）の高等教育第一学位（学士相当）取得後3年を経過した者を対象に行った調査から検討している。すなわち、どの国の高等教育修了者にも必要とされているのは、“問題解決の能力”“話しことばによるコミュニケーション能力”“綿密性・細部に目配りする能力”“プレッシャーの下でも仕事ができる精神力”などであり、日欧で異なる構造を持つものとして、日本では特に“仕事への適応能力”が重視され、ドイツおよび他の欧州諸国で“独力で仕事ができる能力”が重視されている。また、日欧12カ国の中で、日本の卒業年齢が最も若く、それと相関して、大学知識の活用度が最も低い。これらの背景として、日

本では、標準就学年限を逸脱しないように迅速に学校教育を駆け抜け、その後特定領域の幹部人材へ向けて、企業内で独自の訓練を作り込み、なおかつ企業内でジョブ・ローテーションと試行錯誤の機会を提供するという長期間の幹部人材養成が行われるという教育と訓練の2段階型モデルが展開されていることがある。このような日本型幹部人材養成への移行を踏まえた学士課程教育とは、企業社会で仕上げる第二段階に向けた、キャリア選択への第一段階の教育であり、それは各人のキャリア設計を明確にしていく過程である。

大学生時代がこれらの機能を果たすためには、大学生活にある程度適応し、満足を感じる事が必要であり、さらには、適応しきれていない部分や不満足な部分を抱えつつも大学生活に主体的にコミットし、充実感を感じる事が重要な意味を持つことになるであろう。たとえば、大野・茂垣（若原）・三好・内島（2004）は、先行研究を概観し、充実感尺度の得点とアイデンティティ得点との間に有意な正の相関が認められること、アイデンティティ・ステータスにおける達成群、もしくはコミットメントの高い群（現在自己投入群など）が他の群に比較して充実感が高いことを明らかに

している。また、山田（2009）は、同志社大学高等教育・学生研究センターが実施している JCIRP (Japan Cooperative Institutional Research Program) の日本版大学生調査 (JCIRP College Students Survey ; JCSS) を用いた国公立 4 年制大学 8 校の学生 3,961 人を対象とする調査の分析結果から、学生のラーニング・アウトカムを上昇させるには、大学生活全体が充実するような学生のエンゲージメントが不可欠であることを論じている。

一方で、近年、大学への適応の困難な学生が増加しているとの指摘がある (e.g. 谷島, 2012)。学生相談機関の調査においては、大学生のおよそ 1% 程度が不登校問題を呈することが明らかになっている (荒井・石田・大塚・岡本・兒玉, 2011)。牧野 (2001) によれば、1 度でも“大学に行きたくない”と思ったことのある学生に対してその理由を調べたところ、“眠いから”“疲れているから”“授業がおもしろくないから”“大学が自分が期待していたものと違うから”の順で理由があてはまる割合が高いことが明らかにされている。同様に、1 度でも“大学を辞めたい”と思ったことがある学生に対してもその理由を調べたところ“大学が自分が期待していたものと違うから”“授業がおもしろくないから”“大学でやりたいことが特にないから”“他にやりたいことがあるから”の順に理由が当てはまる割合が高いことが明らかにされている (牧野, 2001)。

このように大学への適応が困難な学生が増加している背景として、最近の学生の大学生活が非常に多忙になっていることが考えられる。溝上 (2004) は、1990 年代以降大学生の授業出席率が軒並み上昇しているとともに、最近の大学生活は一般的に非常に多次元にわたり忙しいものとなっており、大学生達は自覚的・無自覚的に大学生活の限られた時間を、“授業に出席する私”“クラブをする私”“アルバイトをする私”“ゲームをするのが好きな私”などさまざまな“私”に分割して、その有機的連関をはかりながら生活していると指摘している。そして、そのような最近の大学生達が大学生活が充実しているかどうかという質問に答えるときには、システム全体を構成する各要素としての“私”の按配を相対的に評価するという (溝上, 2004)。この説に従うならば、最近の大学生において大学生活充実度を高めるためには、大学生活の構成要素を偏りなく、バランスよく充実させないといけないため、非常にデリケートで困難な調整が必要となる。

しかし、学生の大学生活を支えることは、そこでの

適応感を高めるだけではなく、その後の人生をも間接的にサポートすることにもつながるとの指摘もある (石倉・吉岡, 2004)。そうした意味では大学での充実感は、入学後に大学“に”適応することのみならず、持続的に適応感を持ち続ける、あるいは充実感を持ち続けることに大きな意味があると言えよう。

以上より、大学生活充実度を適切に測定すること、また大学生活充実度が何によって左右されるかを明らかにすることは、大学教育を向上させ、大学生時代の意義を十分に機能させていくために必要なことであると考えられる。特に、近年の大学へのアクセスのユニバーサル化に起因する学生集団の変化、すなわち、入学時に高い選抜のメカニズムが機能している大学以外では、学生確保を目的とした入試方法の多様化が進んだこともあいまって、学業成績や大学生活の目的、学習意欲といった面でばらつきの大い学生集団を抱えることになった (岡田・鳥居, 2011) ことが、大学生活充実度を適切に把握し、大学教育を向上させる必要性を高めていると考えられる。このような問題意識から、筆者らは大学生活充実度の研究に着手し、大学生活充実度の作成と大学生活充実度に影響する要因の検討、大学生活充実度を高める教育プログラムの開発を行ってきた。

大学生活充実度、およびそれに影響する要因は、個人によっても、大学によっても、また時期によっても異なる。たとえば、Benesse 教育開発研究センター (2008) は入学難易度が高い大学ほど大学全般に対する満足度が高いことを明らかにしており、木村 (2012) は大学によって大学満足度の構造が異なることを示唆している。そこで、本研究では、大学生活充実度が 4 年間の大学生活の中でどのように推移するのかを明らかにし、そこから、大学生活充実度に影響する要因について検討することを目的とする。

大学生活の中で、その適応や充実感がどのように推移するのかについては、これまでも様々な研究がなされてきた。たとえば大学への適応感や満足感における学年変化に注目した研究も認められる。

そのひとつとして片倉・土田 (1993) は、単科の看護短期大学の 1 年生から 3 年生を対象に、学生 (短大) 生活と適応に焦点を当てて調査を行っている。その結果、学年ごとの傾向に注目すると、1 年生は、学習を含めて何事に対しても積極的・意欲的に取り組もうという向上心が強く、学生生活に期待するものも多く適応行動がみられる。2 年生では、学生生活全般に適応してきているものの、今まで以上の変化を求めようと

する意欲が低下しており、3年生は、学生生活における充実感・満足感を得るために、何事に対しても積極的に取り組みたい気持ちがある反面、長期間に及ぶ臨地実習のため、精神的・肉体的なゆとりが持てず不満が強い傾向があることを明らかにしている。

また大学生が学生生活において感じている不安の種類や水準を測定するために開発された大学生生活不安尺度（藤井，1998）の下位尺度について、学年変化を検討した田中・菅（2007）は、大学不適應においてのみ学年差を見だし、4年生において1年生よりも大学不適應尺度の得点が低いことを報告している。

教育学部に所属する学生に対して大学生生活に関する縦断的調査を実施した吉田・橋本・安藤・植村（1999）は、1年次は大学進学に伴い皆が多くのイベントを経験するが、2年次になると個人差が生じてくることを示している。

木村（2012）は、JCIRPでの上級生用調査JCSSの2005および2007のデータセット（それぞれ、8大学3,961人、16大学6,228人）と新入生用調査JFS（JCIRP Freshman Survey）の2008のデータセット（163大学19,661人）を用いて大学満足度の学年変化を分析した結果、1回生から2回生のところで大学満足度の大きな落ち込みが見られ、3回生・4回生と上がるにつれて、大学満足度が回復していく傾向にあることを明らかにしている。

筆者らの研究においても、上記の大学生生活充実度尺度を用いた過去の一連の調査によって1～4回生を対象としたデータが幾つか得られている（e.g. 川上・坂田・佐久田・奥田，2005，2007，2008，2009）。

奥田・川上・坂田・佐久田（2010a）では、それまでに収集した大学生生活充実度のデータについて大学4年間の差異あるいは経年変化という観点からまとめて分析を行い、大学生生活充実度の学年差・学年変化について検討している。その概要は次の通りである。すなわち、複数年度的女子大学生1～4回生の横断および縦断データを分析した結果、4回生時に大学生生活充実度全般が最も高まる。その理由として、大学生生活の最終段階へ到達したことによる見通しの良さ、卒業論文への取り組みによる高度な専門知識の修得、登校日数の減少からくる学内での無理な人間関係からの解放といった要因や、3回生末頃から4回生秋頃までに盛んに行われる就職活動において自己分析を通じて改めて大学生生活の意義を確認する機会を持った学生が多数いる可能性がある。一方、1回生～3回生に関しては、特に2回生から3回生にかけての大学生生活充実度の推移

について、データによっては2回生から3回生にかけて大学生生活の充実度が学業や交友関係、不安の面などでポジティブに変化する結果とそのような変化の見られない結果が得られたが、2回生から3回生にかけて充実感が高まるのか否かについて、引き続き大学生生活充実度のデータを継続的に収集して、2～3回生間の充実度の推移を確認することが課題である。また、大学生生活充実度の1回生～4回生の推移とそれを左右する要因を明らかにするためには、コホート差も考慮して、より具体的な学生への教育内容やカリキュラムとの関連を調べていくことが必要である。さらに、1回生から2回生にかけての大学生生活充実度には、ほとんど変化がないという結果が示されているが、各下位尺度の4学年間の差異のグラフにおいて2回生を底としたU字あるいは逆への字型の曲線を描いているものが少なくない。4月から7月までの間に大学新入生の不適應感が有意に増大するという報告（水野・田積・炭谷・多胡，2007）や、筆者らの過去の研究（佐久田・奥田・川上・坂田，2007）でも、1回生時は入学当初から時間が経過するにつれて、大学に対する“フィット感”が一部の学生において低下することを示唆するデータもあり、初年次教育などとも関連して1回生から2回生にかけての大学生生活充実度の推移の詳細について検討を加える余地がある。

以上のことから、本研究では、奥田他（2010a）の課題を引き継ぎ、複数コホートの縦断データを用いて大学1回生～4回生の大学生生活充実度の推移を明らかにするとともに、その推移を左右する要因についても検討する。

目的

複数コホートの大学1回生～4回生の縦断的データから大学生生活充実度の4年間にわたる推移を検討し、奥田他（2010a）で得られた知見の検証を行う。

方法

調査時期 2005年から2011年にかけて、1回生時は5月、2回生時以降は10～11月時点における縦断的調査を実施した。

被調査者 大阪樟蔭女子大学心理学科および心理学部に属する、入学年次が2005年～2008年の女子大学生が調査に参加した。このうち4年間にわたる4調査時点すべてに参加した学生（2005年度56名、2006年度33名、2007年度36名、2008年度36名、計161名）の被調査者のみを分析の対象とした。

質問紙 大学生生活充実度尺度（川上他，2005）および“不安”に関する質問を3項目増やした修正版、SoULS-21（奥田・川上・坂田・佐久田，2010b）を用いた¹⁾。

手続き 質問紙を複数の授業内にて配布し、被調査者にその場で回答を求めた。質問紙は授業ごとにまとめて回収した。

結果

入学年度と学年による大学生生活充実度の4年間にわたる学年変化の相違

入学年度（2005～2008年度）と測定学年次（以下、学年；1～4回生）を独立変数、SoULS-21の下位尺度である大学へのコミットメント（以下コミットメント）、交友満足、学業満足²⁾を従属変数とした2要因分散分析を行った（Table 1～3）。その結果、SoULS-21の3つの下位尺度全てにおいて1%水準で学年の主効果が見られた（ $F(3,471)=4.61; 7.80; 19.78; p<.01$ ）が、入学年度の主効果は見られなかった。学年の主効果について多重比較（Bonferroni法）を行った結果、コミットメントでは2回生よりも4回生が、交友満足では1～3回生よりも4回生が、1%水準で有意に得点が高かった。

また学業満足にのみ1%水準で有意な交互作用が見られた（ $F(9,471)=3.25; p<.01$ ）。そこで入学年度（2005～2008年度）の各水準において、学年（1～4回生）の単純主効果の検定を行ったところ、2005年度入学生においては1～3回生より4回生の方が1%水準で有意に高く、2006年度入学生においては2回生より1・3・4回生が、また3回生より4回生の方が1～5%水準で有意に高かった。2007年度入学生では1・2回生に比べ3・4回生が1～5%水準で有意に高く、2008年度入学生では1回生より2～4回生の方が1～5%水準で有意に高かった（以上、Table 4）。

さらに学年（1～4回生）の各水準において、入学年度（2005～2008年度）の単純主効果の検定を行ったところ、1回生と4回生においては、どの入学年度間にも有意な差は見られなかった。2回生では2008年度入学生の学業満足が2005～2007年度入学生よりも1～5%水準で有意に高く、3回生では2005年度入学生よりも2007・2008年度入学生の方がそれぞれ5%、1%水準で有意に高かった（Table 5）。

以上より、入学年度と学年による大学生生活充実度の学年変化については次のようにまとめることができる。まず大学へのコミットメントや交友関係、学業への満足は入学年度（コホート）に関わらず、全体として4回生時

Table 1 入学年度・学年(独立変数)とコミットメント(従属変数)の二要因分散分析

| 入学年度 | 学年 | | | | 全体 |
|------------------|------|------|------|---------|------|
| | 1回生 | 2回生 | 3回生 | 4回生 | |
| 2005 (n = 56) | 3.38 | 3.05 | 3.17 | 3.48 | 3.27 |
| 2006 (n = 33) | 2.97 | 2.79 | 3.10 | 3.08 | 2.99 |
| 2007 (n = 36) | 3.23 | 3.21 | 3.39 | 3.28 | 3.28 |
| 2008 (n = 36) | 3.36 | 3.31 | 3.30 | 3.41 | 3.34 |
| 全体 (n = 161) | 3.25 | 3.09 | 3.23 | 3.34 | 3.22 |
| 主効果 | F 値 | | | | |
| 入学年度 | 2.31 | n.s. | | | |
| 学年 | 4.61 | ** | | 2回生<4回生 | |
| 交互作用 | 1.60 | n.s. | | | |

** $p < .01$

Table 2 入学年度・学年(独立変数)と交友満足(従属変数)の二要因分散分析

| 入学年度 | 学年 | | | | 全体 |
|------------------|------|------|------|-------------|------|
| | 1回生 | 2回生 | 3回生 | 4回生 | |
| 2005 (n = 56) | 3.83 | 3.75 | 3.75 | 4.07 | 3.85 |
| 2006 (n = 33) | 3.96 | 3.90 | 3.95 | 4.16 | 4.00 |
| 2007 (n = 36) | 3.99 | 3.97 | 4.12 | 4.14 | 4.06 |
| 2008 (n = 36) | 3.81 | 4.05 | 4.06 | 4.26 | 4.05 |
| 全体 (n = 161) | 3.89 | 3.90 | 3.94 | 4.15 | |
| 主効果 | F 値 | | | | |
| 入学年度 | 1.53 | n.s. | | | |
| 学年 | 7.80 | ** | | 1,2,3回生<4回生 | |
| 交互作用 | 1.03 | n.s. | | | |

** $p < .01$

Table 3 入学年度・学年(独立変数)と学業満足(従属変数)の二要因分散分析

| 入学年度 | 学年 | | | | 全体 |
|------------------|-------|------|------|------|------|
| | 1回生 | 2回生 | 3回生 | 4回生 | |
| 2005 (n = 56) | 3.37 | 3.27 | 3.32 | 3.76 | 3.43 |
| 2006 (n = 33) | 3.48 | 3.22 | 3.49 | 3.70 | 3.47 |
| 2007 (n = 36) | 3.36 | 3.39 | 3.67 | 3.81 | 3.56 |
| 2008 (n = 36) | 3.40 | 3.72 | 3.82 | 3.76 | 3.67 |
| 全体 (n = 161) | 3.40 | 3.39 | 3.54 | 3.76 | 3.53 |
| 主効果 | F 値 | | | | |
| 入学年度 | 1.89 | n.s. | | | |
| 学年 | 19.78 | ** | | | |
| 交互作用 | 3.25 | ** | | | |

** $p < .01$

Table 4 各入学年度（2005～2008年度）入学生における学年要因の単純主効果検定（学業満足）

| | SS | df | MS | F 値 |
|-----------|------|----|------|----------|
| 2005年度入学生 | 8.45 | 3 | 2.82 | 12.51 ** |
| 2006年度入学生 | 3.71 | 3 | 1.24 | 5.49 ** |
| 2007年度入学生 | 5.18 | 3 | 1.73 | 7.66 ** |
| 2008年度入学生 | 3.77 | 3 | 1.26 | 5.58 ** |

** $p < .01$

Table 5 各学年（1～4回生）における入学年度要因の単純主効果検定（学業満足）

| 回生 | SS | df | MS | F 値 |
|-----|------|----|------|---------|
| 1回生 | 0.33 | 3 | 0.11 | 0.28 |
| 2回生 | 5.53 | 3 | 1.84 | 3.95 ** |
| 3回生 | 6.23 | 3 | 2.08 | 4.42 ** |
| 4回生 | 0.21 | 3 | 0.07 | 0.19 |

** $p < .01$

に最も高まっている（Figure 1～3）。2回生時には大学へのコミットメントが最も低調であった。

こういった学年進行（1～4回生）による推移は、大学へのコミットメントや交友満足についてはコホート差が見られなかったが、学業満足については入学年度によって違いがあった。入学初期（1回生時）はどの年度でも違いがないが、2回生になると、2005・2007年度入学生では1回生と同程度、2006年度入学生は1回生より低下しているが、2008年度入学生のみ学業満足が上昇するという、年度（コホート）間で異なる結果になっている。3回生では、2005年度入学生は1・2回生と変わらず、2006年度入学生は1回生程度に回復し、2007年度入学生は上昇している。そして4回生においてはいずれの年度入学生も学業満足度が高水準となり、再度コホート差がなくなっている（以上、Figure 3参照）。

学業満足の学年変化が年度コホート間で異なる要因

全体として1～2回生時より4回生時の方が大学生生活充実度が高まる現象が各年度で見られることは、問題の部分で述べたように田中他（2007）等の先行研究とも一致した結果である。ただ、学業満足において4回生に向かって値が上昇するプロセスが年度（コホート）によって異なっている。特に、2008年度入学生は2回生において学業満足が上昇し、それが4回生まで維持されている点で、他の年度と違った学年変化を辿っているといえるであろう。

そこで、特に2008年度入学生が1～2回生（2008～2009年度）にかけて経験したことで、学業満足の向上に関わるような要因について、考えうるものを以下に3つ挙げる。

1. 所属組織の改編

調査対象となった学生のうち、2008年度入学生のみ学科にコース選択制度が導入され、2回生進学時に専

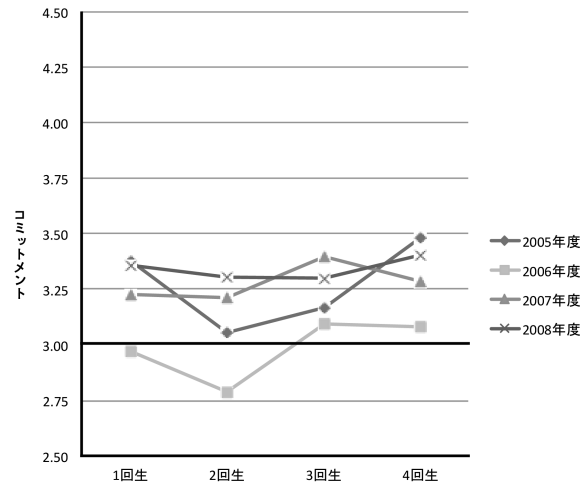


Figure 1 各入学年度のコミットメントの学年変化

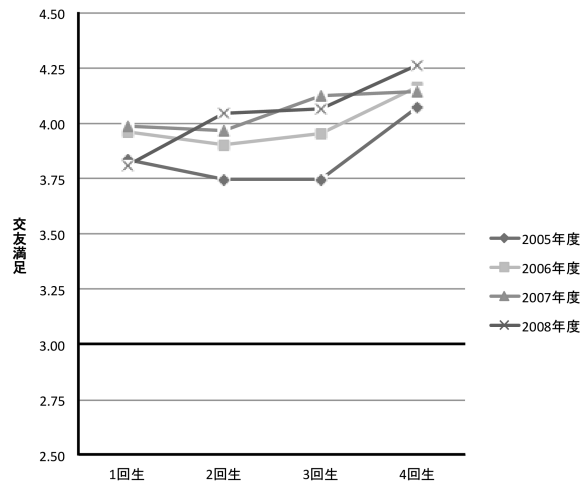


Figure 2 各入学年度の交友満足の学年変化

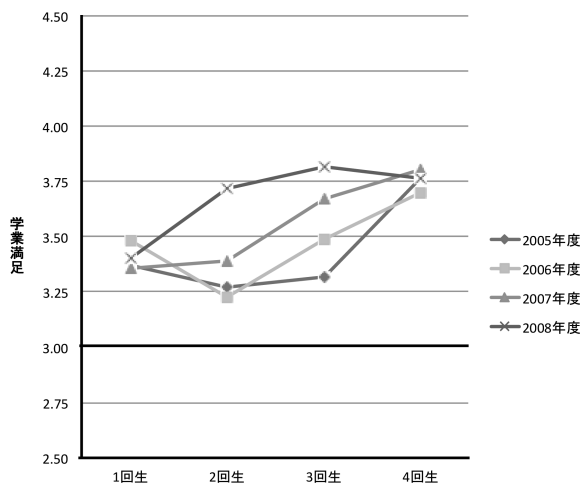


Figure 3 各入学年度の学業満足の学年変化

門領域の異なる4コースのいずれに配属されることになった。どの専門領域に進むかは学生自らが判断し選択することになっていたので、その決断を行うことで、その後の学業に対する関心や積極性、満足感が高まった可能性があると考えられる。

2. カリキュラムの変更

2008年度入学生の2回生配当科目のうち、それまで必修であった3つの実習科目が選択必修となった。このため、学生の科目選択の自由度が幾分高まったと考えられる。

3. 帰属感高揚プログラムの開始

2008年度から1回生を対象に、学科に対する帰属感を高揚させるプログラム（以下、帰属感高揚プログラム）を実施している。このプログラムは、学生生活や学科での学びに関して先輩である在学生・卒業生が振り返りコメントするというインタビューVTRと、学科教員の鼎談によって構成されている。1時間30分の単発プログラムであるが、大学生生活充実度に対して一定の影響があることが報告されている（e.g. 川上・坂田・佐久田・奥田，2012）。プログラム内では、大学で学ぶことの意義について先輩や教員が語るという内容が含まれており、入学初期から低下しがちである学業に対するモチベーションの回復につながっていることが窺え、それが2回生時の学業満足感の上昇につながっているとも考えられる。

1. については、翌年度に心理学科から心理学部（入学時から3学科に分かれている）に改組されたため、コース選択を2年次に行うのは後にも先にも2008年度入学生のみがした経験となった。2. のカリキュラムの変更は、現在までほぼ状況は変わっていない。3. の帰属感高揚プログラムも現在まで継続して毎年実施されているため、2008年度以降の入学生に共通の経験である。よって2009年度以降の入学生の4年間の学年変化について見ていくことで、上記の1～3のどれが2回生時に学業満足を上昇させた要因として有力であるかをある程度判断することが可能となるであろう。

奥田他（2010a）で得られた知見の検証

最後に、本研究の目的である、奥田他（2010a）で得られた知見の検証について述べる。

まず、“4回生時に大学生生活充実度全般が最も高まる”ことは今回も確認された。前回と異なる母集団を対象に短縮版尺度（SoULS-21）を用いて調査しても同様の結果だったことから、これが少なくとも本学心理学部（学科）においてかなり普遍的な現象であると言ってよいであろう。

2～3回生にかけての大学生生活充実度の学年変化について、“肯定的な変化が見られる年度とそうでない年度がある”、すなわち年度によって異なることは、学業満足において今回の分析でも確認された。そのため、やはり年度間で違いが生じる要因の検討が必要となる。

1～2回生にかけて“ほとんど変化ないが、4年間で2回生時が最も底になるグラフがしばしばある”点については、大学へのコミットメントにおいて、あるいは2005～2007年度入学生の学業満足に関してはその通りであったが、交友満足や2008年度入学生の学業満足ではそのような現象が見られず、今回の結果からは必ずしも支持されないことが示された。問題の部分で述べたように、大規模データを用いた木村（2012）では、1～2回生のところで大学満足度の大きな落ち込みが見られ、3回生・4回生と上がるにつれて、大学満足度が回復していく傾向にあることが明らかにされている。しかし、この学年変化に関しては統計的な検定がなされておらず、また、大学によっては1～2回生のところで大学満足度に有意差が認められなかったことも明らかにされている（木村，2012）。したがって、1～2回生の大学充実度の変化に関しては今後さらに研究の蓄積が求められる。

結論と今後の課題

本研究では複数コホートの縦断データを用いて大学1回生～4回生の大学生生活充実度の学年変化を検討した。その結果、大学生生活充実度尺度・SoULS-21を構成するコミットメント、学業満足、交友満足の3つの下位尺度得点において、少なくとも1・2回生時点と比較して、4回生（卒業年次）においては、その得点が向上していることが示された。学業満足については、4回生に至るまでの学年変化が入学年度によって異なる可能性が示されたものの、4回生時に高得点を示して卒業していく点については、すべてのコホートにおいて共通している。これは、“大学生”そのものの学年進行に伴う成長や成熟のためであると解釈することも可能であるし、本学における大学教育が功を奏した結果であるとも考えることもできる。

一方で、学業満足に関してはコホートによる学年変化の差異が認められたが、コミットメント、交友満足に関してはコホートによって学年変化の差異が認められなかった。また、全体として大学生生活充実度にコホートによる差異は認められなかった。これらのことは、大学が準備するカリキュラムやプログラム、あるいは

学科編成など教育する側の対応によって、大学生活における充実感に大きな差異は生じさせないが、学業に関する満足に関しては、教育する側の対応によって早く高めることができることを示唆している。また、本研究において、統計的に有意とはならなかったものの、コミットメントや交友満足についても、学年進行と入学年度との交互作用、すなわちコホート差の傾向が見て取れる (Figure 1・2) ことに着目するならば、できる限り早い段階でコホートの特性を掌握し、それに対応する適切な教育的取り組みを行った場合に、大学生生活充実度の学年変化、さらには大学生生活充実度全体が改善されるという可能性も否定できない。教員とのコミュニケーションが、学習意欲を高め、学習意欲が (学習の充実感に強く影響する) 大学生生活の満足度を高める一方、友人とのコミュニケーションは大学生生活の満足にあまり影響しないという知見もある (見館・永井・北澤・上野, 2008)。したがって、大学生生活を十全に機能させるためには、カリキュラムやプログラムなど教育システムとしての大学教育を整備するのはもちろんのこと、教員による大学生へのきめ細かい教育的配慮や大学生とのコミュニケーションが求められることが推測される。

4 回生時の充実感から、結果良ければ…というわけにはいかないのが教育である。今後も本研究のような定期的・継続的な大学生生活充実度の測定とその分析を蓄積し、より効果的な大学教育のありかたを探求・開発していくことは重要であろう。

注

- 1) 2005～2007年度調査では、川上他 (2005) の大学生生活充実度尺度を使用し、2008～2009年度調査では、修正版を使用し、2010～2011年度調査では、SoULS-21を使用した。
- 2) コミットメント、交友満足、学業満足の得点は、SoULS-21の下位尺度得点の算出方法 (奥田他, 2010b) に従い算出した。もう一つの下位尺度である“不安のなさ”については、2007年度までは大学生生活充実度尺度内での項目数が不足していたため年度間の比較ができず、本研究の結果分析からは割愛した。

引用文献

荒井佐和子・石田弓・大塚泰正・岡本祐子・兒玉憲一 (2011). 不登校大学生に対する大学教員の視点と支援 広島大学心理学研究, **11**, 339-347.

Benesse 教育研究開発センター (2008). 学生満足度と大学教育の問題点 2007.

藤井義久 (1998). 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **68**, 441-448.

石倉健二・吉岡久美子 (2004). 大学生生活における心身の健康に関する調査—留学生と日本人学生の適応とヘルパー志向性— 長崎国際大学論叢, **4**, 225-232.

片倉久美子・土田幸子 (1993). 本学における学生生活の適応に関する実態調査 岩手女子看護短期大学紀要, **1**, 89-98.

川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2005). 新入生オリエンテーションに関する研究(1) 日本心理学会第 69 回大会発表論文集, 1251.

川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2007). 大学生生活充実度における学年差に関する研究 日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集, 71.

川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2008). 大学生生活充実度における学年差に関する研究(2) 日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集, 193.

川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2009). 大学生生活充実度における学年差に関する研究(3) 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集, 576.

川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2012). 心理学部における帰属高揚プログラム「心理学と私」大阪樟蔭女子大学研究紀要, **2**, 105-112.

木村拓也 (2012). 大学満足度の学年変化とその規定要因の探索—項目反応理論 (IRT) と Interruptive Structural Modeling (ISM) を用いた分析 クオリティエデュケーション, **4**, 73-92.

牧野幸志 (2001). 大学生の不登校に関する基礎的研究(1)—大学生の不登校と退学希望の理由の探索— 高松大学紀要, **36**, 79-91.

見館好隆・永井正洋・北澤武・上野淳 (2008). 大学生の学習意欲、大学生生活の満足度を規定する要因について 日本教育工学会論文誌, **32**, 189-196.

溝上慎一 (2004). 現代大学生論—ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる 日本放送出版協会

水野邦夫・田積徹・炭谷将史・多胡陽介 (2007). 大学新入生の大学適応を促進する授業プログラムの検討 聖泉論叢, **15**, 125-140.

及川恵・坂本真士 (2008). 大学生の精神的不適応に対する予防的アプローチ—授業の場を活用した抑うつ的一次予防プログラムの改訂と効果の検討— 京都大学高等教育研究, **14**, 145-156.

- 岡田有司・鳥居朋子 (2011). 私立大学における大学生の学習成果の規定要因－ユニバーサル・アクセス時代における多様性と質保証の視点から－ 京都大学高等教育研究, **17**, 15-26.
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 (2010a). 大学1回生から4回生までの横断および縦断データから見た大学生活充実度の推移 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **9**, 1-14.
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 (2010b). 大学生活充実感に関する研究(1)－4年度分の調査データに基づく大学生活充実度尺度の短縮版の作成－ 日本心理学会第74回大会発表論文集, 1212.
- 大野久・茂垣(若原)まどか・三好昭子・内島香絵(2004). MIMICモデルによるアイデンティティの実感としての充実感の構造の検討 教育心理学研究, **52**, 320-330.
- 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 (2007). 新入生オリエンテーションに関する研究(3)－オリエンテーション成果が大学生活充実度の変動に及ぼす影響－ 日本心理学会第71回大会発表論文集, 1169.
- 田中存・菅千索 (2007). 大学生生活不安に関する心理学からのアプローチ 和歌山大学教育学部紀要教育科学, **57**, 15-22.
- 谷島弘仁 (2012). 大学生における大学への適応に関する検討 人間科学研究, **27**, 19-27.
- 山田礼子 (2009). 学生の情緒的側面の充実と教育成果－CSSとJCSSの結果分析から－ 大学論集, **40**, 181-198.
- 吉本圭一 (2004). 高等教育から職業生活への移行の日独比較：社会的自立にかかる大学機能の検討 ドイツ研究, **37/38**, 10-23.
- 吉田俊和・橋本剛・安藤直樹・植村善太郎 (1999). 大学生の適応過程に関する縦断的研究(1) 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), **46**, 75-98.

The Transition of University Life Satisfaction through the First Year to the Fourth Year in Longitudinal Data of Four Cohorts

Faculty of Psychology, Department of Clinical Psychology
Hiroyuki SAKATA

Faculty of Psychology, Department of Business Psychology
Yuko SAKUTA

Faculty of Psychology, Department of Clinical Psychology
Akira OKUDA

Faculty of Psychology, Department of Developmental and Educational Psychology
Masahiro KAWAKAMI

Abstract

To take full advantage of the function of university life, it is important for students to commit their own university life and to get contentment to the university. And also to improve university education, it is necessary to investigate and clarify the determinants of university life satisfaction. So in this study, based on earlier studies (Okuda, Kawakami, Sakata, and Sakuta, 2010a), we investigated transition of university life satisfaction of students through the first year to the fourth year with four cohorts using Scales of University Life Satisfaction, its modified version and shortened version (SoULS-21). The results showed that university life satisfaction gets highest score generally in their fourth grade, and which is consistent with the results showed in Okuda et al. (2010a). Also, the results showed that the transition of study satisfaction varies depending on the cohorts, which may be caused by their curriculum, university program, organization of department, and characteristics of the cohort.

Keywords : university life satisfaction, difference between the years, longitudinal data, cohorts, university satisfaction

